公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 アーツカウンシル新潟

文化芸術基盤整備促進支援事業

基盤助成取り組みレポート

平成29年度～令和元年度

ARTS COUNCIL NIIGATA

ARTS
COUNCIL
NIIGATA

平成29年度～令和元年度

基盤助成取り組みレポート

（公財）新潟市芸術文化振興財団アーツカウンシル新潟

ARTS COUNCIL NIIGATA

アーツカウンシル新潟 ロゴマークについて

信濃川と阿賀野川の河口に位置する新潟市。水と土との交わり―恵みと闘い―から、豊かな歴史風土と文化を育んできた先人たちの創造性が今も息づいています。
水色の二本線は日本有数の大河である二つの川を、茶色は市民の原風景である砂丘列と土を、そして、緑色は水と土との交わりが生み出した豊かな自然と田園を表しています。

CONTENTS

02 アーツカウンシル新潟 ごあいさつ
アーツカウンシル新潟 プログラムディレクター　杉浦 幹男

03 新潟市 ごあいさつ
新潟市文化創造推進課課長　丸山 夕香

04 アーツカウンシル新潟からみえたもの。
新潟大学教育学部芸術環境講座教授　丹治 嘉彦

05 試行錯誤の意義
プロジェクト・コーディネーター／
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任准教授　若林 朋子

06 アーツカウンシル新潟について

07 文化芸術基盤整備促進支援事業について

09 事業の実施期間／交付金額

取り組みレポート

単年度事業

10 郷土野菜を起点に新潟の食の輪を広げる
食の陣実行委員会

11 福祉とアートで紡ぐ、緩やかな出会い
角地 智史

12 デザイナーと社会や市民がつながるために
新潟アートディレクターズクラブ

13 地域づくりに文化活動を取り入れる
T-Base（株式会社 T-Base-Life）

14 地域や人々をつなぐ音楽活動をめざして
鈴木 清隆

15 表現をとおして当たり前を見つめ直す
高橋 亜紗子

2年継続事業

16 新潟市の「美術」と「アート」の現状を探る
認定特定非営利活動法人 新潟絵屋

3年継続事業

18 心に寄り添う音と、音楽。音楽療法士×演奏家＝創造的音楽プロジェクト
新潟県音楽療法士協会

22 郷土の芸能を伝え、つながり、守りつづける
新潟市農村文化協議会（一般財団法人 北方文化博物館）

26 継続中事業

資料編

28 基盤助成実施スケジュール

29 事業報告会および説明・相談会実施状況

30 文化芸術基盤整備促進支援事業募集要領（概要）

アーツカウンシル新潟 ごあいさつ

アーツカウンシル新潟 プログラムディレクター　杉浦 幹男

『平成29年度～令和元年度 基盤助成取り組みレポート』の発刊にあたり、ごあいさつを申し上げます。

近年、地域における文化芸術施策推進のための仕組みの一つとして、“地域アーツカウンシル”に注目が集まっています。アーツカウンシルは、第二次大戦後の英国で誕生して以降、世界中に広がっており、その定義も様々ですが、わが国においては「専門家による地域の文化芸術のための中間支援機能」と集約することができます。新潟市に先行し、横浜市、沖縄県、東京都、大阪府・市などで設立され、その後も毎年新しいアーツカウンシルが設立されています。しかし、各地の組織や機能も様々であり、わが国におけるアーツカウンシルのあり方が定まっているわけではありません。

新潟市においては、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の文化プログラムの推進を契機とし、市がめざす「文化創造交流都市」の実現に向けた文化芸術施策の推進のための新たな中心核としての地域アーツカウンシルの役割が期待されています。

加えて、地域における文化芸術の役割への期待も大きく変化しています。平成29年6月に制定された文化芸術基本法において「文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない」とされ、文化芸術がそれ自体の振興だけでなく、他の関連分野と連携し、地域の課題解決に向けた重要なファクターとして位置づけられました。

こうした文化芸術とその施策を取り巻く環境の変化は、未だ黎明期にあるわが国の地域アーツカウンシルの役割のあり方に大きな影響を与えており、単なる文化芸術のための支援だけでなく、文化芸術を中核とした、地域における課題解決のための分野横断的なプラットフォームとしての機能も期待されています。

こうした環境の変化を踏まえながら、アーツカウンシル新潟では様々な経験を持った専門家であるプログラムオフィサーを迎え、市内の文化芸術団体の皆さまと共に取り組む“伴走型支援”を進めてきました。それは同時に、わが国におけるアーツカウンシルのあり方を試行する挑戦でもあります。

この報告書をご覧いただき、文化芸術が持つ可能性を広げ、実現していく取り組みに関心をお持ちいただくとともに、この挑戦にぜひ参画していただければ幸いです。

新潟市 ごあいさつ

新潟市文化創造推進課課長　丸山 夕香

新潟市は平成28年9月に「アーツカウンシル新潟」を（公財）新潟市芸術文化振興財団内に設立しました。そして、その翌年、「文化芸術基盤整備促進支援事業」という助成制度がスタートしました。

「アーツカウンシル新潟」と「文化芸術基盤整備促進支援事業」。どちらも市民の皆さまには、まだ聞きなれないフレーズだと思いますが、本市の文化創造推進に大切な役割を果たしていくものとして、その取り組みを進めています。

アーツカウンシルとは、専門性を持ったスタッフが様々な団体や活動の支援を行いながら文化芸術振興に取り組む、英国を発祥とした機関です。本市のアーツカウンシルでも、専門スタッフを配置し、市民の文化芸術活動支援を業務の主軸としました。

また、文化芸術基盤整備促進支援事業は、アーツカウンシル新潟の設立後間もなく、本市の市民活動状況を調査したプログラムディレクターから、新たな助成制度として提案をいただきました。

助成の対象となる基盤整備は、単年度で目に見える活動ができるとは限らず、さらに、アーツカウンシル新潟のスタッフが年間を通じて伴走型で支援することから、助成できる件数も多くありません。一方で、専門性の高いアーツカウンシルだからこそできる助成制度であり、社会の中の仕組み作りに地道にアプローチすることで、これまでの助成制度とは異なる成果を生みだすことが期待できました。

そしてこの3年の間に、様々な団体が助成制度に申請くださり、アーツカウンシル新潟とたくさんの話し合いを繰り返しながら、着実に実績を積み重ねてきました。これまで、伝統芸能団体のネットワークができたり、福祉施設での音楽活動モデルが作られたり、デザイナーと他分野との中間支援組織が立ち上がったりと、いくつかの変化が表れています。この変化が文化芸術とかかわりの少なかった人々や社会の中にも徐々に広がっていき、多くの市民にとって文化芸術がもっと身近になることを願っています。

これからも、アーツカウンシル新潟とこの助成制度が市民の皆さまに活用され、次の新しい変化を生み出し、本市に文化活動の様々な可能性を作り出すことをめざしていきたいと思います。

アーツカウンシル新潟からみえたもの。

新潟大学教育学部芸術環境講座教授
丹治 嘉彦

現代においてアートの役割とは？この問いに対して、心豊かな、そしてゆとりある社会のためにアートが必要であるとの認識が一般的にはある。そのような中でアートが機能する場は現実社会において限定されていると言えないか。美術館や画廊といったアート作品を鑑賞する場において、また商品等を流通することを目的とした広告物がそれにあたるだろう。しかしながら、今日において社会が抱える問題は複雑化し、我々の暮らしや営みに少なからず影を落としている。ネット上における不特定多数が一握りを攻撃する態度、社会的弱者への差別あるいは教育現場からそれらを見渡せば、児童、生徒の不登校やいじめといったことの深刻さがその一例でもある。これらは生きづらさを含めた問題として浮上しており、また均質化した場を求めるが故にそこからはみ出るものを排除する排他的な気分が広がっているとも言える。これらの状況に対してアートの領域から様々な支援が行われている。例えば障がいを抱えている方や何らかの生きづらさを感じている方がアート活動をとおして元気になること、あるいは人口減が進む地域に対してアート的行為を展開しながら活動する方々等が挙げられる。

基盤助成に応募した各団体は単に自己実現（絵画や彫刻作品等の発表）のために活動を行なっているわけではない。それぞれ社会課題の抽出を行い、その解決策を関わった方々や地域と一体となって思考しオリジナルな表現へと至っている。しかし、その動きは独自性をめざすが故に他者から見れば異質なものに映るかもしれない。各団体はこの問題を乗り越えるために大変な苦労があったと予想するが、それぞれの成果を見ると魅力的なものが目につくばかりである。本当に面白い。また、彼らが醸し出した物語は単に表現形態の表出だけはなく、普段の生活では出会うことができない人との出会い、あるいは見ることのできない風景との出会いを誘発したことにつながる。各団体のそれぞれの物語は水面上の小さな波紋のようでもある。しかしながらこの小さな波紋はアーツカウンシル新潟の支援のもと少しずつ広がりを見せはじめている。そしてこの波紋こそが社会に潜む様々な問題解決の糸口になると確信する。私は新潟市で生まれたこの特異な波紋をいつまでも見続けたいと思う。

丹治 嘉彦
福島県福島市生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。東京藝術大学美術研究科絵画専攻修了。現在、新潟大学教育学部芸術環境講座教授。昭和60年より東京京橋等で作家活動を展開、大地の芸術祭、水と土の芸術祭、瀬戸内国際芸術祭等に出品。平成24年、27年の水と土の芸術祭ではアート部門のディレクターを務める。趣味は走ること。季節の移ろいを感じながら走るのは格別。

試行錯誤の意義

撮影：安田有里 ©Ko Na design

プロジェクト・コーディネーター／
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任准教授
若林 朋子

団体の組織基盤や仕組みづくり、環境整備に対する助成制度を開始すると聞いた時、アーツカウンシル（AC）新潟の挑戦が始まるのだなと感じた。基盤強化系の助成は、助成先の組織に向き合い、運営やスタッフ体制に目配りし、助成対象とともに当初目標を見据えながら最終アウトプットを導いていく。自ずと「伴走型支援」になるが、過度な介入は禁物だし、放置もできない。助成先も何か心に期すことがあって組織基盤強化を望むわけで、どのように底力を引き出し、新たな活路を見出してもらうかが問われる。つまり、助成者も助成を受ける側も、ともに試行錯誤するのが基盤助成事業である。

この3年間を振り返ると、両者ともに多くの試行錯誤があったと思う。全11件の活動のうち半数は2年目以降も継続、3年間継続して取り組んだ団体も3件あった。令和元年度で3年間の活動を終えた新潟県音楽療法士協会と新潟市農村文化協議会は、年々目標や方針が明解になっていった。最終アウトプットや最終報告会での所感は、試行錯誤を経たからこその気づきに満ち、新潟の当該領域を牽引していくであろう頼もしさを感じた。

AC新潟プログラムオフィサーの皆さんも、制度内容や伴走の試行錯誤によく向き合った。こうした助成制度は軌道に乗るまでに時間がかかるものだが、よく検討を重ねていると思う。その努力の姿勢が、未来の助成先に伝わりますように。今年、事務局が事業報告書をまとめたこともすばらしい。助成団体にとって、年次報告書（アニュアルレポート）は極めて重要な自己検証の機会であり、未来の助成対象者へのメッセージ、研究者の情報源、社会に向けたコミュニケーションツールでもある。しかし、日本のアーツカウンシル系組織の多くは、助成事業の年次報告書を発行していない。これは自己検証していないことに等しく、私は長年課題だと感じている。本報告書は、AC新潟の助成に対する意識の高さのあらわれである。

今後も躊躇することなく、むしろあらゆる試行錯誤にこそ助成の意義を見出して、基盤助成事業を継続してほしいと願っている。これは何年もかけて育てていく助成プログラムなのだ。

若林 朋子
デザイン会社勤務を経て英国で文化政策を学ぶ。平成11年～25年企業メセナ協議会勤務。プログラム・オフィサーとして企業が行う文化活動の推進と芸術支援の環境整備に従事。25年よりフリー。事業コーディネート、執筆、調査研究、評価、助成制度設計、自治体文化政策やNPO支援等に取り組む。NPO理事（芸術家と子どもたち、JCDN、芸術公社）、監事（アートプラットフォーム、ON-PAM、音まち計画、アーツエンブレイス、TPAM）、アートによる復興支援 ARTS for HOPE 運営委員。社会デザイン領域で文化、アートの可能性を探る日々。

アーツカウンシル新潟について

新潟市の文化は、豊かな歴史と自然によって育まれてきました。

今に伝わる歴史遺産や伝統芸能、食文化から、新たに創造される現代アート、演劇、ダンスなど、多様な“地域の宝物”がたくさんあります。この“地域の宝物”を守り伝え、そして、育んでいき、文化芸術の力で市民の誰もが輝けるまちを一緒に創造していきたいと考え、アーツカウンシル新潟は事業を進めています。

アーツカウンシル新潟の設立の背景には、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化プログラムの推進があります。『オリンピック憲章』には、スポーツ競技だけでなく、複数の文化イベントを開催する文化と教育の祭典であることが定められ、近年は開催期間中だけでなく、その準備段階から多様な文化イベント――「文化プログラム」が実施されています。特に、ロンドン2012大会では、英国全土で文化プログラムが実施され、単なる文化芸術のためのイベントではなく、地域社会の課題に向き合う取り組みが展開され、注目されました。その際、地域における取り組みを推進する役割を果たしたのが各地のアーツカウンシルでした。これらの取り組みが契機となり、より多くの人々が、地域が持つ課題を考えて解決することにつながり、今でも継続して活動が続けられています。

こうしたロンドンでの取り組みを良い前例として、東京2020大会の文化プログラムも、文化芸術が社会との関係を構築する絶好の契機となることが期待されています。

新潟市は、この文化プログラムに全市一体で取り組み、市民の文化芸術活動の活性化を図るとともに、国際観光の振興や経済活動の推進につなげ、大会終了後もその成果を継承し、持続的な「文化創造交流都市」の推進体制を構築することを目的に、平成28年9月26日、アーツカウンシル新潟を公益財団法人新潟市芸術文化振興財団事務局内に設立しました。

アーツカウンシル新潟は、以下の4つの柱をもとに活動しています。

- 文化芸術活動に関する相談や助成事業を行う「市民の文化芸術活動の支援」
- 市内の文化芸術活動に関する「調査・研究」
- 調査・研究結果や各種助成事業などの「情報発信」
- 文化芸術事業に対する提案や提言などを行う「企画・立案」

本冊子の文化芸術基盤整備促進支援事業も「市民の文化芸術活動の支援」の一つです。

また、新潟市をはじめ経済団体や教育機関など様々な主体と連携をしながら文化芸術に携わる皆さまを多角的に支援してまいります。日々の文化芸術活動の困りごとや不安など、ぜひアーツカウンシル新潟にお寄せください。

文化芸術基盤整備促進支援事業について

アーツカウンシル新潟では、市民の皆さまの想いを形にするため、様々な助成事業を実施しています。その一つである「文化芸術基盤整備促進支援事業」（以下、「基盤助成」）は、市内の文化芸術団体および個人に向けた支援を行う、新潟市からの委託事業です。

基盤助成は、市内の文化芸術団体が将来に向けて継続して活動していくための取り組み、多くの市民が文化芸術に触れることのできる環境づくり、文化芸術を活用した地域の課題解決や魅力の発信、豊かな市民生活の実現を図る取り組みに対して、広く事業を公募してきました。

基盤助成の大きな特長は、資金的支援に加え、事業を進めるにあたっての専門的な助言、市内外の専門家・専門機関の紹介（マッチングサービス）など、事業者の多様なニーズにあわせた“伴走型”の支援を実施している点です。

長期的な発展を見据え、より充実した取り組みとなるよう、アーツカウンシル新潟のプログラムディレクター、プログラムオフィサーが採択団体とともに考え、サポートしながら進めていきます。また、単なる公演などの一過性のイベントではなく、通年の取り組みを対象としているのも特長のひとつです。

これまでの取り組みを振り返って―

採択団体の取り組みを振り返ると、共通している点があります。それは“つながる”ということです。今まで接点を持つことが難しかった個人や他の団体に声を掛けて新たな組織をつくる、自分たちとは異なる分野の関係者と共同でセミナーを開催する、一緒に新たなプログラムを立ち上げるなど、各団体において積極的な試みがなされてきました。

取り組みのなかで得たつながりは、団体の基盤となり、その活動を大きく飛躍させます。実際に、助成期間終了後も取り組みを継続する、さらに新たな展開をみせる団体も増えてきています。アーツカウンシル新潟では、引き続き皆さまの取り組みを支援していきたいと思います。

次頁からお伝えする採択団体の事業報告では、各団体の取り組み実績や活動に対する想いが記されており、加えて、ともに伴走してきたプログラムオフィサーのコメントも記載しています。今後の採択団体の展開にどうぞご期待ください。

そして、文化芸術団体の運営を充実させたい、文化芸術の力でもっと新潟を盛り上げていきたいという皆さまからの申請をお待ちしております。

※公募内容の詳細については、p30、31をご参照ください。

取り組みレポート

事業の実施期間／交付金額

掲載ページ	採択年度 / 採択者名（敬称略）	平成29	平成30	令和元	令和2
10	食の陣実行委員会	315,000円（助成率⅔）			
11	角地 智史	395,000円（助成率⅔）			
12	新潟アートディレクターズクラブ	505,000円（助成率⅔）			
13	T-Base（株式会社 T-Base-Life）	970,000円（助成率⅔）			
14	鈴木 清隆			520,000円（助成率⅔）	
15	高橋 亜紗子			600,000円（助成率⅔）	
16	特定非営利活動法人新潟絵屋	560,000円（助成率⅔）	600,000円（助成率½）		
18	新潟県音楽療法士協会	500,000円（助成率⅔）	815,000円（助成率½）	860,000円（助成率⅓）	
22	新潟市農村文化協議会（一般社団法人 北方文化博物館）	1,000,000円（助成率⅔）	1,000,000円（助成率½）	500,000円（助成率⅓）	
26	NEWGATE（迫 一成）		745,000円（助成率⅔）	690,000円（助成率½）	750,000円（予定）（助成率⅓）
26	水野 祐介			550,000円（助成率⅔）	595,000円（予定）（助成率½）
26	まんまるミュージック				1,000,000円（予定）（助成率⅔）

〈凡例〉
←→ 実施期間
315,000円 交付金額
（助成率⅔） 助成率

01

平成29年度採択

郷土野菜を起点に新潟の食の輪を広げる

事業名　「にいがた食文化協議会」の設立準備

申請者名　食の陣実行委員会

新潟を中心にライターとして活動している丸山智子さんが、新潟の食に興味を抱いたことから申請に至りました。当初、個人の申請でしたが、活動開始時に申請者が所属している食の陣実行委員会としての申請に変更されました。個人の動きやすさを保ちながら、組織としてのネットワークを活かした活動となりました。

過去の料理から、現在の食材へ。発想の転換がターニングポイント

当初の計画では、古くから伝わる地元の食文化についての情報収集によって料理法や調理技術を紐解き、古来の郷土料理の普及を軸に、産官学が協同した協議会の結成を想定していました。しかし、文献の不足で取り組みが難航したうえ、食材の品種改良や食文化の変容により実現性が低いことが懸念されました。

料理と食材それぞれの立場から新潟野菜について話す機会を作りました。写真は新潟の農家の皆さんと五條 源兵衛の中谷さん

そこで、過去に遡るのではなく、現代に残る新潟の地元野菜を中心にこれからの食文化を考えることにしました。地元野菜を特色とした飲食店「五條 源兵衛」（奈良県奈良市）で話を聞いたことで、活動のイメージが定まり、このヒアリング以降、新潟で料理や食材にたずさわっている人との関わりを増やしていきました。例えば、野菜流通の専門家と農家の方の出会いの場をつくり、地元野菜を再評価する機会も創出しました。

進め方を修正し、訴求力が増したこともあり、協議会のキックオフミーティングには13名が集いました。

プログラムオフィサーより

活動の軸が定まるまで、丸山さんにとって試行錯誤の日々だったと思います。過去を遡る手法から未来目線の取り組みへと転換し、全国の専門家に協力を仰いだり、食の陣実行委員会のネットワークを活用したことが奏功し、活動がぐっと前に進みました。

基盤助成において、活動は常に順調に進むわけではありません。一年間の中で様々な方法を試みたことが、丸山さんらしい食文化への光の当て方につながったと思います。（福島）

02

平成29年度採択

福祉とアートで紡ぐ、緩やかな出会い

事業名　ソーシャルインクルージョンと創作表現活動に関する基盤強化及び新たな可能性に関する調査研究

申請者名　角地 智史

アートキャンプ新潟のディレクターや、新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASCアートディレクターを務めるなど、障がいのある人の創作活動をサポートすると共に、作家としても様々な展覧会に参加しています。

お互いを理解するということ

社会の中で障がい者と接する機会が限られていることから、偏見や隔たりが生じることがあります。この課題に対し、文化芸術活動は人と人とが緩やかに出会い、関わる機会をつくることができ、お互いを理解するひとつの機会として有効であると考えます。

この取り組みでは、社会的な理由により隔たりのある人同士が、文化芸術活動をとおしてちょうどよく関わることができる環境づくりをめざし、一般の方が福祉施設で滞在できるプログラムを企画しました。

それぞれに過ごして、見つける「ナイス」

福祉施設に滞在する中で、見つけたモノやコトから「ナイス」だと感じたことを、参加者と施設職員とで共有する「ナイスステイ」を実施しました。参加者はこれまで福祉に興味はあったけれど、施設に行く機会がなかった方々です。いわゆる見学やボランティアとは異なり、特別な役割を持たずに長時間（半日または1日）施設の中で過ごすことで、何気ない行動や会話から支援員のケアの姿勢を垣間みるような、参加者それぞれに発見がある機会となりました。

表現が生まれた時の話を聞く参加者たち

参加者と福祉施設との間に緩やかな関係が生まれ、終了後も自主的に福祉施設に通って利用者との交流を深める人や、福祉に関する映画の上映会を企画する人などが現れ、少しずつ協働する機会が生まれています。

プログラムオフィサーより

自由滞在を基本とする「ナイスステイ」は、参加者それぞれが能動的に過ごすことにより、福祉施設内で生じる様々な気づきを得ることができました。このように、福祉に気軽に触れたり、考えたりできる機会が増えていくことを期待しています。（北沢）

03

平成29年度採択

デザイナーと社会や市民がつながるために

事業名　市内のデザイン分野における組織基盤の強化及び新たな可能性に関する調査研究

申請者名　新潟アートディレクターズクラブ

新潟アートディレクターズクラブ（以下NADC）は、新潟のクリエイターの意識向上やレベルアップ、交流のための機会や場を創出することを目的に平成18年に設立されました。県内で活動するデザイナー 100名以上の会員がおり、年1回の作品公開審査と受賞イベント、年鑑の発行などを行っています。

これからの新潟のデザインを考える

デザインの持つ地域の個性を活かすプロデュース機能が注目される中、新潟市においても、その重要性の認識の普及や独自のデザイン研究開発、デザイナー育成等が求められています。

この取り組みでは、デザイナーを対象としたセミナーや先進地視察（山形県山形市）等の学びの機会の提供や、市民公開でのクロストークの開催により、地域や社会の中でのデザインの可能性と、デザイナーがより一層活躍できる環境の構築に向けた検討が進められました。

山形市への視察

市内のデザイナーの意識・実態把握の進展に加え、デザインへの関心が高い市民の多さや、新潟と他地域でのデザインを取り巻く環境の違い等への気づきを得たことで、新潟でデザインが果たせる役割と可能性への期待が高まったことが大きな成果です。また、新潟デザインの構築を推進する団体やコミュニティの重要性の認識も広がりました。

プログラムオフィサーより

デザイン思考やデザイン経営等への関心が高まる中、デザイナー側から地域や社会に対してアクションを起こすための取り組みでした。NADCという会員が多い大きな組織で動く難しさもあり、当該団体での申請・採択は平成29年度のみとなりましたが、翌年度からはデザイナー・迫一成さんによる申請・採択につながり、有志による任意団体「NEWGATE」の設立と、定期的なデザイン相談会やデザイン勉強会等の動きに発展しています。（石田）

04

平成29年度採択

地域づくりに文化活動を取り入れる

事業名　文化芸術を活用したエリアマネジメントの取り組みに向けた検討

申請者名　T-Base（株式会社 T-Base-Life）

株式会社T-Base-Lifeは新潟市中央区を中心に、空き家を活用した地域交流の場と情報発信を行う拠点事業を展開しています。空き家の調査や地域の分析を行い、空きスペースの利用、活用提案、地域活性化に取り組んでいます。

エリアリノベーションで地域を元気に

増加する空き家に象徴される中心市街地の衰退、その余波を受けながら事業を行うT-Baseは、地域経済の衰えを実感するなかで、未利用空間としての空き家の可能性に気づきました。駅に隣接している地区の立地の良い空き家は、文化活動の拠点としての利用価値が高いため、空き家の文化的利用が地域再生につながると考えました。

そこで、文化芸術によるエリアマネジメントに成功した国内先進事例の大阪、横浜、福岡、名古屋を視察し、未利用空間の文化的利用の手法と運営を学び、文化交流をうむ都市間連携にむけたネットワークを築きました。その後、視察の成果として「エリアリノベーション」をテーマにした公開シンポジウムを開催し、先進事例の情報を共有するとともに、地域再生の立役者との意見交換を通じ、新潟における事業展開の方向性を可視化することで、賛同者の和を広げるコミュニティづくりを継続していくことになりました。

「エリアリノベーション」公開シンポジウム

プログラムオフィサーより

エリアマネジメント、文化的活動を用いた建物活用の中でも、特に行政の手が届きにくい部分に気づくことができたのではないでしょうか。今後は、申請者が会社の事業として独自の展開を進められることが見込め、2年目以降は助成金を活用しないことになりました。対象エリアの検討や他エリアでの適応、連携について検討し、新潟市の中心市街地における拠点形成およびエリアマネジメントのモデル事業の実施、展開をめざしてほしいです。（高橋）

05

令和元年度採択

地域や人々をつなぐ音楽活動をめざして

事業名　音楽を通したコミュニケーション支援における演奏家の役割と協力体制の在り方に関する実践的研究

申請者名　鈴木 清隆

室内合奏団「新潟ARS NOVA」の運営に携わり、楽団員をサポートしてきました。また、MRI（磁気共鳴画像装置）を用いた脳研究を専門とし、近年は小児科医と共同で自閉症スペクトラム症（ASD）や注意欠陥多動性障害（ADHD）に代表される広汎用性発達障害（PDD）の神経基盤に関する研究を進めています。

音楽活動の可能性を広げたい

申請者は室内合奏団のサポートをしていることから、演奏家が地域で活動していくための基盤を整備していきたいと考え、本取り組みをはじめました。先進事例調査として、社会包摂プログラムに力を入れている沖縄県のオーケストラや音楽団体を視察したほか、音楽が本来的に持つ、立場や環境を越えて「人と人とをつなぐ力」に着目し、新潟市内の演奏家向けのワークショップを開催しました。

様々な音楽活動の事例紹介
鈴木氏（中央）と柿塚氏（右）

演奏家のための音楽コミュニケーション・ワークショップ開催

講師に日本センチュリー交響楽団コミュニティプログラム担当マネージャーの柿塚拓真氏、ピアニスト・作曲家の鈴木潤氏を招いて、ワークショップを開催しました。地域や人々をつなぐ音楽活動の事例紹介や、音楽コミュニケーションの「場をつくる」というコンセプトを体験しました。
音楽のもつ可能性や、聴衆の反応を意識する大切さなど、実践的な学びの機会となりました。

プログラムオフィサーより

先進事例視察では、社会包摂プログラムについてのヒアリングのほか、オーケストラの運営方法についても学ぶことができ、大変有意義だったと思います。ワークショップでは、演奏家のほか、福祉や教育関係者など計12名にご参加いただきました。初年度は小さな取り組みかもしれませんが、参加してくださった方々との関係性を大切に、取り組みが広がっていくことを期待しています。（北沢）

06

令和元年度採択

表現をとおして当たり前を見つめ直す

事業名　分野の垣根を超えて互いの違いを知り新たな可能性を見つける中間支援組織の形成研究

申請者名　高橋 亜紗子

身体感覚やコミュニケーションに関心の高い高橋亜紗子さん、食と暮らしをテーマにイベント企画を行う吉野さくらさん、福祉プロダクトの販売や福祉施設の対外発信にも携わる中嶋梨沙さんの3名で、グループ「ちらちら」として活動しています。それぞれの興味関心を元に、気軽に多様な分野に触れる・体感できる場を作っています。

互いの違いを知り、楽しむ豊かさ

多様な人々と共生する社会がめざされる中、令和元年度障害者芸術文化祭の開催を控えた新潟で、文化を媒介として地域と福祉をつなぐ中間支援組織の形成をめざし活動を進めていきました。
創作活動を取り入れている他県の福祉事業所への視察を行い、視察報告会ではグループワークを行うなど、福祉の面白さや可能性について考える機会となりました。
活動の主軸となった「筆談カフェ」では、音声を使わない筆記だけの会話により、伝えることの難しさと喜びを味わう場づくりに取り組みました。「音声ガイド付き映画鑑賞」、「哲学対話」、「当事者研究スゴロク」等を同時開催することにより、障がいのある方の視点やその場に集まった人々の多様な考えに触れ、新しい視点を発見してもらう機会となりました。

筆談カフェの様子

プログラムオフィサーより

筆談カフェには職業も年齢もバラバラの計75名が参加し、初めてのコミュニケーション方法で築かれたつながりはとても貴重なものだったと思います。
今後も高橋さんをはじめチームの皆さんで活動を続けていくそうで、より多くの新潟市民の方に福祉や表現の面白さを伝えていっていただきたいです。（根木）

07

平成29年、30年度採択

新潟市の「美術」と「アート」の現状を探る

事業名　美術分野における新潟市内組織基盤の形成と新たな可能性に関する調査研究 その1・その2

申請者名　認定特定非営利活動法人 新潟絵屋

平成12年に設立、平成17年にNPO法人となり、同年から株式会社新潟ビルサービスとの共同企業体で新潟市の芸術文化施設「砂丘館」の指定管理者として、自主事業の企画運営を担当しています。平成19年に上大川前通10に移転、建物を解体移築したほか、平成20年からはフリーペーパー「新潟島とその周辺ギャラリー&ミュージアムマップ」を刊行しています。

美術団体、ギャラリー・画廊の現状と課題

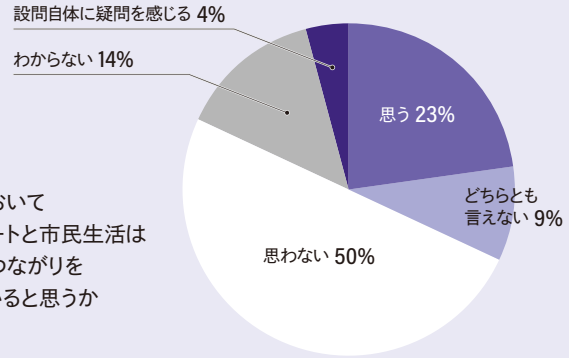
平成29年度、平成30年度の2年度をとおして、新潟市域の美術をめぐる総合的な現状把握を目的とした調査を実施しました。

初年度は、主に美術作品の作り手たちが中心となる美術団体・グループ17団体と、美術作品を展示・販売する場を運営している画廊26か所を対象に、アンケートとヒアリングを行いました。その調査結果、全ての美術団体・グループは「会員の高齢化」や「会員数の減少」「若い会員の少ないこと」を課題としており、メンバーの高齢化により団体・グループの今後の活動力や影響力の低下が避けられない状況であることが指摘できます。また画廊は、この10数年間に市域で活発に設立され、特に近年は都市部から離れた地域でも誕生している状況がある一方で、「訪れる人の少なさ、認知度の低さ」、「販売の困難」、「売ることと伝えることのバランス」、「紹介したい作家、発表意欲のある美術家 ―特に若い作家― の少なさ」の大きく4つを課題と感じていることがわかりました。

新潟絵屋

美術における新しい動きの把握

初年度の調査では、新潟市における現代アート等のいわば美術における新しい動きの姿が反映されていません。そこで 2 年度目には、従来の美術や現代アート等となんらかの重なりや接点をもちつつ活動を行う、比較的若い人々を対象にアンケートとヒアリングでの調査を行うこととしました。



それぞれ多様な活動背景を持ちつつ、「地域との関わり」や「空き家・歴史的なものの再評価」、「障がい者と社会とのつながり」、「市民プロジェクト・水と土の芸術祭」等の共通した切り口も見いだせる 15 の活動体を対象とし、22 の回答者から回答を得ました。

「美術」と「アート」に対する関心の違いや、美術館・画廊を訪れる頻度、美術作品の購入経験、美術団体との交流経験等を尋ねる設問への回答からは、今後の新潟市の美術団体のあり方に対するきわめて厳しく、率直な意見が聞かれました。また、水と土の芸術祭についてや、美術やアートと市民生活のつながりに関する設問への回答からは、市民の中での意識・関心の違いや、「美術」の敷居の高さ、関わるきっかけや入口の必要性等、今後に向けて示唆に富んだ声が集まりました。

事業を終えて

2年度をかけて行った調査結果を、新潟市の「美術」や「アート」の関係者や関心を持つ方々と共有していきたいと考えています。そして、さらに必要な調査やヒアリングも重ねつつ、今後に向けた意見交換の機会などを設けていきたいと考えています。

プログラムオフィサーより

時代や社会の変化に伴い「美術」の概念が広がりを持ちつつある中で、新潟市においても、水と土の芸術祭の開催や障がい者アートへの注目の高まり等により、関わる主体が多様化してきています。この調査は、そうした流れを踏まえた上で現状把握を進めた貴重な取り組みでした。美術が市民にとってより身近なものになる、そのための議論の礎として、調査結果が活用されることが期待されます。（石田）

08

平成29年、30年、令和元年度採択

心に寄り添う音と、音楽。音楽療法士×演奏家＝創造的音楽プロジェクト

事業名　社会的課題を音楽を使って解決する可能性に関する調査研究

申請者名　新潟県音楽療法士協会

音楽療法で、「音」と「音楽」が持つ様々な力を、対象者のニーズに応じて意図的に活用し、音楽活動をとおして心身機能の維持・向上とQOL（生活の質）の向上を図ります。また音楽療法の質を上げるための研究、音楽療法士及び一般向けに音楽療法について研修を行い、音楽療法の啓発と普及に努めています。

誰もが心豊かに暮らせる新潟市をめざして――

高齢化が進み、障がい者の社会での孤立などが問題視されるなか、文化芸術を活かした“ソーシャル・インクルージョン（社会包摂）”の取り組みが注目されています。しかしながら、音楽をはじめとする文化芸術は、障がいの有無や年代の違いを超えて参加できるものであるにもかかわらず、現在の新潟市においては、福祉や医療、教育の現場との連携が十分とは言えません。多様な個性が尊重され、誰もが音や音楽を楽しめる環境づくり、音楽活動を通じた心身ともに豊かな社会の実現をめざし、本取り組みを進めることになりました。

英国視察、マンチェスター・カメラータとの出会い

取り組み初年度（平成29年度）は先進事例の調査として、英国の文化芸術団体を視察しました。視察先の一つであるマンチェスター・カメラータは、音楽によって人間性・社会性を育む先駆的な参加型学習プログラムを実施する英国有数の室内管弦楽団です。本視察では、同楽団が行う高齢者福祉施設での音楽プログラム「ミュージック・イン・マインド」の現場に同行することができました。そこでは、音楽療法士と同楽団の演奏家がペアを組んで施設を訪問し、認知症を患う入所者、施設職員が一体となり、ともに音を奏でていきます。言葉に頼らず、入所者の表情や雰囲気を汲み取り、即興的に音のキャッチボールを交わしたり、メロディを重ねたり。誰もが主体的に参加し、安心して自分を表現できる場が、そこにはありました。

シュワーティング氏による即興技法ワークショップ

即興技法を学ぶワークショップの開催

英国視察で感銘を受け、新潟でも音楽療法士と演奏家がともに行う音楽プログラムを実施してみたい、と強く感じました。マンチェスター・カメラータの行う音楽プログラムの大きな特長は、音楽療法をベースとした即興技法を用いていることです。対象者の様子にあわせて音を奏でたり、コミュニケーションを図るには高い技術が必要となります。そこで2年目（平成30年度）の取り組みとして、マンチェスター・カメラータで活動している、ブリジット・シュワーティング氏（ノードフ・ロビンズ認定音楽療法士）を英国から招き、即興技法に関するワークショップを行いました。県内外から音楽療法士や演奏家、医療・福祉関係者ら40人以上が参加し、実践的なトレーニングを行ったほか、実際にシュワーティング氏に新潟市内の福祉施設で、知的障がいを持つ方を対象にセッションをしていただきました。技術を学ぶ良い機会となっただけではなく、ワークショップ参加者である新潟市内の演奏家や、福祉関係者と出会い、関係を築くことができました。

音楽療法士×演奏家＝創造的音楽プロジェクトはじまる

最終年（令和元年度）は、前年度実施したワークショップ等をとおして知り合った演奏家と協力し、即興演奏を用いた「創造的音楽セッション」の開発に取り組みました。今回は、新潟市内の3つの分野（「高齢」「成人」「児童」）の社会福祉施設で実施することになりました。実施施設への訪問、ヒアリングを経て、音楽療法士が対象者の特徴や身体機能を考慮してプログラムの素案を作成し、演奏家が音楽的な表現や技術を加えていきます。対象者がより主体的でクリエイティブに表現できる音楽的環境を創り出すことを目標とし、対象者はもちろんのこと、音楽療法士や演奏家、施設職員も参加して、音による自由なコミュニケーションを促すことをめざしました。

自分らしく居られる「場」を音楽でつくる

プロジェクトは3つの社会福祉施設で、それぞれ3回ずつ実施しました。どの施設の対象者も、最初は戸惑いがある様子でしたが、回を重ねるごとに緊張がほぐれ、音でのコミュニケーションを楽しみ、自発的な表現（自ら楽器を鳴らすなど）が増えていきました。これは、このプログラムへの参加方法の多様性が確保できたことが大きな要因であると考えます。また、プログラム実施後は、音楽療法士と演奏家、施設職員、スーパーバイザー（有識者）とで振り返りの時間を設けました。プログラムを実施することで起こる対象者の変化、プログラムの進行方法などを検証することで改善点を見つけ、今後の活動へ活かしていきます。

高齢者とのセッション ── 好みの楽器を自由に演奏。音によるコミュニケーションを楽しむ

障がいを持つ方（成人）とのセッション ── 対象者の太鼓のリズムにあわせて演奏家（クラリネット）がメロディを奏でていく

セッション終了後、参加したメンバー全員で振り返りを行う

事業を終えて

本プログラムの開発、実施は試行錯誤の連続でしたが、確かな手応えを感じました。また3年間の取り組みをとおして、演奏家や福祉関係者の皆さんとつながることができ、様々な分野と協力体制を築いていくことの重要性を感じました。このつながりを活かし、さらなるプロジェクトを進めていきたいと思います。

プログラムオフィサーより

音楽の持つ包摂的な特長を活かしたプログラムの調査研究、実施を3年間かけて達成することができました。英国マンチェスター・カメラータをはじめ、国内外の文化芸術団体との関係性を築けたことは、大きな財産であると思います。今後、取り組みを継続していくためには資金の確保、プログラムのブラッシュアップなどの課題がありますが、更なる活動ができるよう、支援を続けていきたいと思います。（北沢）

アーツカウンシル新潟ウェブサイトで新潟県音楽療法士協会副会長 大竹孔三さんのインタビューを掲載しています。ぜひご覧ください。
https://artscouncil-niigata.jp/blog/3591/

09

平成29年、30年、令和元年度採択

郷土の芸能を伝え、つながり、守りつづける

事業名　「新潟市農村文化協議会」の設立・運営

申請者名　新潟市農村文化協議会（一般財団法人 北方文化博物館）

新潟市農村文化協議会は、平成29年度に採択された「『新潟市農村文化協議会』の設立」事業により設立されました。神楽や木遣りなど地域に根差した郷土芸能が新潟市内各地で保存継承されています。各保存会や団体などの関係者間の連携を図り、活動内容やノウハウなどを共有・活用し、各団体の活動の発展に向けた取り組みを行っています。令和元年度末には、新潟市内7区から11の保存会・団体が参加しています。

地域のお祭り、あの神楽、あの木遣り、あの太鼓が見られなくなるかもしれない

郷土芸能を取り巻く環境は、高齢化等による後継者不足であることや、活動資金の確保が難しいことが指摘されています。実際に、後継者がいなくて舞を教えられない、なくなってしまうかもしれない、他の団体はどうしているのだろう、という声が聞こえてきます。そこで、地域の状況や程度の違いこそあれ、同じことを考えている保存会や団体が一体になり、知恵を共有することで、団体ごとの活動が発展するのではないか、と考え「新潟市農村文化協議会」の設立にむけて動きはじめました。

郷土芸能、他の地域はどうしているのだろうか

まず、どのような会がよいのか、他の地域ではどのような取り組みがあるのかを知る必要があると考えました。そこで初年度は、全国の郷土芸能を取り巻く動きと地域との関わりを参考にすることにしました。小岩秀太郎氏（（公社）全日本郷土芸能協会事務局次長）を招き、「伝統芸能の再生とコミュニティにおける交流と連携の創出」として講演会を実施しました。そこから、郷土芸能が元気になることは地域が元気になることであり、地域が元気になるということは郷土芸能も元気になるということに気づきました。

そして、協議会設立の第一歩として、初年度は事務局の北方文化博物館が毎年実施している「でんでん祭り」（「田」から生まれた文化を「伝」えたいという想いから命名された、年に一度秋に開催される催し。北方文化博物館がある新潟市江南区横越地区の「神楽」を地域の子どもたちや若い担い手に伝え、「神楽」の背景にある物語とともに次世代へ残していくことをめざしている）のつながりを中心に、木津棧俵（さんばいし）神楽保存会（江南区）、横越上町神楽保存会（江南区）、横越新田神楽保存会（江南区）、高森神楽保存会（北区）、赤塚伝統芸能保存会（西区）の5団体が立ち上がりました。このうち3団体が舞を披露するとともに、各団体の紹介・今後の活動をディスカッションするキックオフミーティングを開催し、「新潟市農村文化協議会」が設立されました。ディスカッションをとおして、各団体のノウハウを共有し、共有した知恵や設立した協議会をより有益に展開にするためには、新潟市全域に仲間を増やしていくことが次のステップであるということに気づきました。

仲間を増やそう

2年度目は、初年度に築いたネットワークを基礎として、新潟市内8区10団体に対して個別に出向き、協議会の設立と参加に向けたご案内をしました。その後、「第一回新潟市郷土芸能団体意見交換会」を実施しました。この会には、9団体11名の郷土芸能団体の方に参加いただきました。2班に分かれ、それぞれの団体の構成や継承方法、子どもたちや学校への声掛けの仕方、お金の集め方、情報発信の仕方、今困っていることを話し合いました。そこでは、新たな取り組み方法に気づけた、同じことで困っている団体がいたという声が溢れました。そして、他団体の情報を知る仕組みがない、道具の修理や購入など、困ったときや相談したいときに、話ができる団体や交流

木津棧俵神楽保存会による獅子頭制作を見学。
作成中の頭を見せてもらう

の場がないという意見が多数挙げられたことから、情報発信プラットフォームと内部ネットワークが必要であるという共通意識が生まれました。この会では、大澤寅雄氏（(株) ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員）と藤浩志氏（秋田公立美術大学 教授）から地域の先進的な取り組みをご紹介いただき、情報発信プラットフォームの共通イメージを持つことができました。

横越新田神楽保存会への練習見学では、獅子の中に入れてもらうことができ、新しい発見につながった

この後、意見が多かった情報発信プラットフォームおよび内部ネットワークの立ち上げと運用について協議会で話し合う機会を設け、農村文化協議会ホームページ（https://artscouncil-niigata.jp/kagura/）を開設した他、内部ネットワークとしてメールで情報共有をすることになりました。

交流、はじまる

メールで連絡を取り合っても、共有できる情報は限られます。やはり、実際に顔を合わせてそれぞれの団体がどのようなことをしているのかを知る必要があると感じました。そこで3年度目は、内部ネットワークの強化に力を入れました。

まずは互いのお祭りを見に行こうとスケジュール調整をしましたが、基本的な問題にぶつかりました。いくつもの会員団体の祭礼や奉納日が重なってしまうのです。新潟市の地域に根ざした郷土芸能は、春季と秋季の祭礼で奉納されることが多いです。活動の期間がほとんど同じであるために、お祭りを見に行ったり、情報交換をする機会を持ったりすることが難しいのです。そこで、祭礼で奉納する舞の準備や練習を会員同士で見学し合うことにしました。見学をした団体にとって、他団体の練習の様子を見たりすることはもちろん、頭（かしら）を作っているところに寄せてもらったりすることは初めての経験でした。

他の団体とつながること、それは自らの郷土芸能を強くし、守っていくこと

見学では、ただ見るだけではなく、実際に一緒に舞ったり、笛を吹いたりしました。一緒に演舞することで、見るだけではわからない道具ひとつひとつの工夫や違い、節の取り方の同じ部分や違いに気づきます。また、質問も飛び交い、「この方法はうちでもできるかも」「ぜひ取り入れたい」と活動のヒントを得る場になりました。さらにはこの活動をきっかけに、祭礼時に他の地域で神楽舞を奉納するという画期的な交流に結びついたり、「他の団体はどうしているのだろう」と思ったときに聞き合えるような関係が生まれたりしています。

練習見学をきっかけに、横越新田神楽保存会が栄町神楽（秋葉区）の拠点地域で奉納舞を披露した

3年度目には、協議会が公演出演依頼に対する受け皿にもなりました。会員団体が、新潟市の東アジア文化都市交流事業の一環として韓国で神楽を披露した他、国民文化祭の郷土芸能祭に出演するなど、多くの機会を得ました。

神社での奉納を第一に考えながらも、各団体の誇れる郷土芸能が互いにつながり、協力し合える形を続けていきたいです。

事業を終えて

協議会の立ち上げから会員集めの頃は、協議会員はそのメリットを理解していても実感することが難しかったです。しかし、3年目に実際に内部交流、外への発信ができ、手応えを感じることができました。協議会の機能を本当に必要としているのは、声も上げられていない団体だと思います。今後は内部交流を続けながら、そういった団体へ手を伸ばしていきたいです。

プログラムオフィサーより

今回できあがった協議会は、互いの郷土芸能に対する敬意を大切にしたつながり、迷ったときに相談し合える人脈網だと思います。本当に困っている団体への協力が必要である、と3年目の最後に協議会の方々に感じていただけたことはとても心強く感じています。今後も仲間づくり、他団体との交流を通じた郷土芸能の保存継承を続けてほしいです。（高橋）

アーツカウンシル新潟ウェブサイトで新潟市農村文化協議会 山川潤さん、呉井善行さん、馬場大輔さんのインタビューを掲載しています。ぜひご覧ください。
https://artscouncil-niigata.jp/blog/3590/

継続中事業

10

平成30年、令和元年、2年度採択

デザイン活動の基盤組織の維持継続の為の調査実験

申請者名　NEWGATE（迫 一成）

取り組み概要　デザインの相談会・勉強会の実施や、他分野・他団体との関係構築をとおして、デザインの力が活かされる豊かな地域社会をめざします。

11

令和元年、2年度採択

新潟市におけるフィルムコミッション機能の強化に向けた調査研究

申請者名　水野 祐介

取り組み概要　市内のロケーション調査とアーカイブ化をとおして映画ロケ誘致に必要な情報を整理し、同時に協力者を募り組織化に取り組みます。

12

令和2年度採択

音楽を活用した子育て環境醸成に関する実践的研究と、子育て支援アーティストの育成

申請者名　まんまるミュージック

取り組み概要　コンサート等の音楽活動を活かして楽しい育児環境づくりや地域コミュニティ、世代間交流をめざします。

資料編

基盤助成実施スケジュール

※スケジュールは年度により変更になる可能性があります。
※初回の募集による採択事業の採択金額が予算に満たなかった場合のみ、追加募集を実施いたします。

1 事前相談

取り組みたい事業が本助成事業の趣旨に合うか、一度ご相談いただくことをお勧めしています。
〈説明・相談会の開催〉2月上旬

▼

2 応募・申請

申請書及び必要書類をアーツカウンシル新潟へ提出します。
〈申請受付期間〉2月中

▼

3 審査

書類審査及びプレゼンテーション審査を行います。有識者等の審査員が、5つの評価項目に則って審査します。
〈プレゼンテーション審査会〉3月下旬

▼

4 採択・不採択

採択・不採択の結果を申請者に通知書で通知します。

▼

5 事業の実施

採択された事業者は、採択の趣旨を踏まえ、担当プログラムオフィサーと随時情報を共有しながら取り組みを実施します。
〈助成対象期間〉採択通知書に記載の日付から当該年度の3月31日まで

▼

6 事業完了報告

〈完了報告書の提出〉事業完了の日から30日以内、または当該年度の3月31日までに完了報告書を提出します。
〈報告会への参加〉事業採択者が当該年度の取り組み内容とその成果について報告します。（一般公開）

▼

7 助成金の交付

完了報告書の確定検査後、助成金を交付します。

事業報告会および説明・相談会実施状況

【事業報告会】

■ 平成30年度文化芸術基盤整備促進支援事業 報告会

日時／平成31年3月23日(土) 15:00〜16:30（開場 14:30）　会場／新潟市役所分館 106会議室

■ 令和元年度文化芸術基盤整備促進支援事業 報告会

※新型コロナウイルス感染拡大のため一般参加を中止

日時／令和2年3月21日(土) 13:30〜17:00　会場／ゆいぽーと クリエイティブスタジオ

【説明・相談会】

■ 文化芸術活動の助成金 説明・相談会

日時／令和元年5月11日(土)
午前の部 10:00〜12:00、午後の部 13:00〜15:00

会場／ゆいぽーと 2階 クリエイティブルーム2

内容／各部の冒頭約20分で説明会、
その後個別相談会（5テーブル、1団体最大30分）を実施

■ 令和2年度文化芸術基盤整備促進支援事業 説明・相談会

日時／令和2年2月1日(土) 10:00〜12:00

会場／ゆいぽーと クリエイティブスタジオ

内容／文化芸術基盤整備促進支援事業の紹介、
事業採択者のクロストーク
（令和元年度採択者 迫 一成氏〈NEWGATE代表〉×
大竹 孔三氏〈新潟県音楽療法士協会副会長〉）
個別相談

※「平日夜の相談会」として2月5日(水)、12日(水) 18:00〜20:00
アーツカウンシル新潟文化情報スペースで個別相談会をあわせて実施。

■ 文化芸術活動への助成制度 説明・相談会

※新型コロナウイルス感染拡大のため会場、実施内容を一部変更

日時／令和2年4月25日(土) 午前の部 10:00〜12:00、午後の部 13:00〜15:00

会場／アーツカウンシル新潟 文化情報スペース

内容／お申し込みをいただいた方々との個別相談会のみ実施

文化芸術基盤整備促進支援事業募集要領（概要）

※詳細はアーツカウンシル新潟ウェブサイトをご確認ください。

【事業の趣旨】

アーツカウンシル新潟では、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の文化プログラムの展開を契機として、令和2年以降も市内の文化芸術団体が将来に向けて継続して活動していくための取り組み、多くの市民が文化芸術に触れることのできる環境づくり、文化芸術を活用した地域の課題解決や魅力の発信、豊かな市民生活の実現を図る取り組みに対して、広く事業を公募します。
アーツカウンシル新潟では、資金的支援に加えて、組織運営、課題解決策など、事業を進めるにあたっての専門的な助言、市内外の専門家、専門機関の紹介（マッチングサービス）など、事業者の多様なニーズにあわせた“伴走型”の支援を実施します。

【対象となる取り組み】

■ 対象となるジャンル

文学や音楽、美術、演劇、舞踊などの「芸術」のほか、メディア芸術、伝統芸能、デザイン、工芸、生活文化、歴史文化、食文化、などを含む、幅広い分野。

■ 取り組みの条件

- 新潟市内の文化芸術団体（新規・既存を問わない）が、「社会との接点」を意識した活動を持続・継続させていくための取り組みであること。
- 実施する主体（団体、個人）としての成果を見込むものではなく、広く成果が共有できる取り組みであること。

【助成の対象者】

以下の全ての資格を満たしていることが必要です。なお、申請の要件に適合しないと判断された場合は、審査の対象とならない場合もあります。

- 新潟市内に在住する個人、または代表者が新潟市内に在住し、かつ構成員が主に新潟市民の団体であって本拠地が新潟市内にあること。なお、個人や個別の団体に資するものではなく、複数の団体や個人、あるいは業界団体等で取り組むことが望ましい。
- 助成対象事業を的確に遂行するために必要な費用のうち、自己負担分の調達に関し充分な財務的処理能力を有していること。
- 助成対象事業に係る経理その他の事務について、的確な管理体制及び処理能力を有していること。
- 市税を滞納していない者であること。
- 事業関係者に暴力団関係者を有していないこと。

【得られる支援】

■ 助成金による支援

助成金の額　1事業につき上限額100万円、下限額10万円。5千円単位（端数切捨）
助成率　対象となる経費の　1年目＝3分の2以内
2年目＝2分の1以内
3年目＝3分の1以内

■ 対象期間

交付決定日～当該年度末　※全ての経費について、採択年度内に支払いを完了する必要があります。

■ その他の支援

本事業は、通年の取り組みに対して、助成金による資金支援に加えて、プログラムディレクター、プログラムオフィサーが事業実施者の皆さまとの相談を交えながら、随時必要な支援を行います。支援については必要に応じてご相談ください。

【審査時の評価項目】

以下の5つの評価項目に則って有識者等の審査員が審査します。

固有性・新規性	•地域文化の固有性が配慮されているか。 •新たな視点からの取り組みとなっているか。
持続性・継続性	•持続性・継続性に配慮されているか。あるいは持続性・継続性の保持に貢献するものであるか。
人材育成	•事務局人員を含む人材育成に資するものであるか。あらゆる教育の場面に汎用的なものとなっているか。
社会性	•地域の課題解決に貢献するものであるか。その実現に向けた取り組み体制が構築できているか。
波及性	•成果が文化芸術団体をはじめとする団体・組織で共有することができるか。それが可能な取り組みとなっているか。

平成29年度～令和元年度 基盤助成取り組みレポート

発行日	令和2年6月
編集	高橋 郁乃（アーツカウンシル新潟 プログラムオフィサー） 北沢 理美（アーツカウンシル新潟 プログラムオフィサー）
写真	採択事業者提供
デザイン	小山田 奈央子
印刷	株式会社 ウィザップ
発行	**アーツカウンシル新潟** 公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団 〒951-8062 新潟市中央区西堀前通六番町894番地1 西堀六番館ビル 5階 TEL 025-378-4690 FAX 025-378-4663 e-mail artscouncil@niigata.email.ne.jp HP https://artscouncil-niigata.jp